



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ドイツ現代史における「ヨーロッパ」理念の諸相 : ヴァネッサ・コンツェの研究によせて
Author(s)	板橋, 拓己
Description	書評
Citation	北大法学論集, 59(5), 264[319]-257[326]
Issue Date	2009-01-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/35660
Type	departmental bulletin paper
File Information	59-5_p264-257.pdf



ドイツ現代史における 「ヨーロッパ」理念の諸相

—— ヴァネッサ・コンツェの研究によせて ——

板 橋 拓 己

1.

現在、いかに実際のヨーロッパ統合の民主的正当性に疑問が突きつけられていようと、「ヨーロッパ」という理念・言説それ自体は、自由民主主義や多様性の尊重（「統一のなかの多様性」）と結びつき、一つの規範的概念として機能している。このことは、とりわけ現代ドイツの言説状況に当て嵌まる。第二次大戦後のドイツ連邦共和国は、自由民主主義を基盤としたヨーロッパ統合を基本路線として追求してきた。そして、少なくとも公的な言論空間においては、「ヨーロッパ」は自由民主主義を体現すべき秩序として表象され続けている。しかし他方でドイツは、20世紀前半に「ヨーロッパ」、あるいは（現在では忌避される概念である）「中欧（Mitteleuropa）」や「ライヒ（Reich）」といった理念を掲げて、ヨーロッパにおける覇権的秩序を追求した歴史ももつ。

それでは、こうした20世紀ドイツにおける「ヨーロッパ」理念の諸相・変遷はどのように把握できるのだろうか？ これは、ドイツのヨーロッパ統合への姿勢を深層において理解するために必要な作業なのは勿論のこと、ドイツ社会の民主化の進展と態様を測るためにも不可欠な作業である。

しかし、従来の理念史的研究はこの問題に十分に答えてこなかったように思われる。「ヨーロッパ」理念や「ヨーロッパ・アイデンティティ」の史的研究は、現実の統合と並行する形で進められ、統合史研究の中では最初期から存在する分野であり、冷戦の終焉やEUの東方拡大によって「ヨーロッパ」の範囲・基

準が問われるに至って、さらに活況を呈している分野である¹。しかしこうした研究は、しばしばその対象が置かれたナショナルな文脈を等閑にしがちである（無論こうした研究の意義を否定しているわけではない）。

また、ドイツを対象を絞った「ヨーロッパ」理念史研究も、上記の問いに対して満足する回答を与えてきたとはいえない。まず、従来の研究においては、「ヨーロッパ」や「中欧」などの「ヨーロッパ」に関わる領域概念が個別に研究され、その理念相互間の関係は殆ど問われてこなかった。また既存の多くの研究は、「1945年」あるいは第二次大戦を、「断絶」のポイントとして、即ち覇権主義的なヨーロッパ構想の挫折と自由民主主義的な「ヨーロッパ」理念の誕生のポイントとして、無条件に受け容れてきた²。

従って、20世紀ドイツにおける「ヨーロッパ」理念の諸相・変遷を問う場合、一義的な「ヨーロッパ」理念のみを検討するのではなく、「ヨーロッパ」秩序に関わる理念の諸相を総合的に把握すると共に、戦前・戦後の連続性と断絶を問い直す必要がある。この課題に答えようとした画期的業績が、2005年に出版されたヴァネッサ・コンツェの『ドイツ人のヨーロッパ：ドイツにおけるヨーロッパ理念、ライヒの伝統と西欧志向の狭間で（1920－1970年）』（Vanessa Conze, *Das Europa der Deutschen. Ideen von Europa in Deutschland zwischen Reichstradition und Westorientierung (1920-1970)*, München, Oldenbourg, 2005, 453S.）である³。以下では、まずこの著作の内容を紹介した上で、その意義と今後の課題を示していきたい。

2.

コンツェは、「今日の我々のヨーロッパ像（Europabild）は…自由＝民主主義的（liberal-demokratisch）かつ自由＝多元主義的（freiheitlich-pluralistisch）な価値を基盤としている」と確認した上で、「1960年代まで…ドイツには多くのヨーロッパ理念や概念が存在していた」ことを指摘し、「アーベントラント（Abendland）」や「中欧」、「パンヨーロッパ（Paneuropa）」、「ライヒ」、「グロースラウム（Großraum）」のような、「ヨーロッパとその（諸）社会を、宗派的・身分制的＝エリート的・帝國的・覇権的な基準に従って秩序づけようとする世界像・秩序イメージ」の存在の重要性を強調する。つまり、現在では忘却されているが、少なくとも1960年代までは多様な「ヨーロッパ」理念がドイツに共存していたのである。そこでコンツェは、「ヨーロッパ」理念を、専ら自由民

主主義的な意味に切り詰めるよりも、その異質性及び変化と断絶を明らかにする方が、今日の「ヨーロッパ」像の由来やヨーロッパ統合の進展を理解するには適切であり、学問的にも有益であると主張する。

こうして本書のテーマは、この様々な「ヨーロッパ」理念の歴史的な対抗と、現在のヨーロッパ理解に至る長いプロセスを研究することに設定される。そのためにコンツェが選んだ対象は、「アーベントラント」と「西欧 (West-Europa)」という二つの競合する「ヨーロッパ」理念であり、その担い手である「アーベントラント運動 (Abendländische Bewegung)」と「ヨーロッパ連盟 (Europa-Union)」という二つの組織（どちらも戦間期に人的・組織的ルーツをもち、50年代に影響力を有した）である。この二つの理念・運動の歴史的発展や、その背後にある世界像・秩序像、担い手の経歴・思想・利害を対象に、戦間期から60年代後半までのドイツにおける「ヨーロッパ」理念の連続性と変化が、膨大な史料に基づいて実証的に研究される。

まず「アーベントラント」は、中世ヨーロッパのキリスト教的な統一性を想起させる、反近代・反自由主義・反共的な「伝統的概念」であり、ヨーロッパ社会の「再キリスト教化」と権威主義的・階層的な国家・社会編成を追求する理念である。この理念は、第一次大戦後にドイツで流行し、とりわけ南ドイツのカトリック・ミリュエーに普及した。戦間期におけるこの理念の主唱者たちは、雑誌『アーベントラント』に集った。彼らは、ドイツを「西欧 (Westen)」とは理解していなかったが、ロカルノ期にヨーロッパ、特にフランスやポーランドとの「協調 (Verständigung)」を追求した。しかし30年代初頭には「協調」から離反し、ヨーロッパにおけるドイツの優位を要求する「中欧」や「ライヒ」理念と結びついていく。彼らの大多数はナチス政権掌握後もドイツに留まったが、そこでナチスの「グロースラウム」や「新しいヨーロッパ」といった秩序構想に接近する。彼らの「ライヒ」理念への傾斜と反共主義がナチスへの架橋を容易にしたのである。

戦後に至るアーベントラント主義者たちの経歴は多様である。多くの者が貴族的あるいはカトリック的な出自と社会化によって「アーベントラント」理念を抱くようになったが、第二次大戦以降、多くの故郷被追放者 (Heimatvertriebene) も運動に加わっていく。また、メルカッツ (Hans-Joachim von Merkatz) のように、プロイセンのプロテスタントであっても、保守的な社会像や反共から運動に加わった政治家もいた。さらに亡命帰国者の中にも、

オットー・フォン・ハプスブルクのような重要人物が存在した。

第二次大戦後、アーベントラント主義者は、新たに創刊された『新アーベントラント (Neues Abendland)』に集う。彼らは、戦後直後のドイツ社会の雰囲気背景に、「アーベントラント」の文化的・宗教的要素を前面に掲げて、その理念を流行させた。さらに冷戦の進展によってアーベントラント運動は政治化し、「アーベントラント・アカデミー (Abendländische Akademie)」のような組織を設立していく。彼らは大衆運動よりも政治家への非公式の助言という手法を好み、なかでもオットー・フォン・ハプスブルクが会長を務めた CEDI (Centre Européen de Documentation et Information) は、スペインやフランスの政治家にも働きかけた。また、彼らはその激しい反共から西側統合を支持していたが、他方でアメリカに対しても懐疑的であった（それゆえ60年代には「ゴーリスト (Gaullisten)」の陣営に与する)。

しかし、50年代に西ドイツ社会の「自由主義化 (Liberalisierung)」が進展すると、あまりに反動的であったアーベントラント運動は影響力を喪失していく。それでも60年代には、オットー・フォン・ハプスブルク下の「パンヨーロッパ連盟 (Paneuropa-Union)」の中で、「アーベントラント」理念は「現代化 (Modernisierung)」に成功する。つまり、アーベントラント主義者は、反議会主義など時代に適合しなくなった思考を放棄する一方、統一ヨーロッパの基盤はキリスト教でなければならないという確信や、保守的な社会像など、戦間期から連続する思想的諸要素を維持したのである。またパンヨーロッパ連盟に存在した多くの被追放者たちが、ハプスブルク帝国や「中欧」への追憶を保存していくことになった。こうして「アーベントラント」の「中核」は現代にも維持されるのだが、これは最早「アーベントラント」という理念を掲げていない。「アーベントラント」は、50年代以降の社会的変化、即ち「自由主義化」・「西欧化 (Westernisierung)」によって、影響力を喪失したのである。

この社会的変化の中で、「アーベントラント」のような伝統的概念とは対照的に、自由民主主義的・多元主義的な秩序を志向する「西欧」理念は、ヨーロッパ連盟を担い手として連邦共和国に定着していく。

この「西欧」理念も戦間期にルーツがある。ヴァイマル期のヨーロッパ統合推進団体である「ヨーロッパ協調連盟 (Verband für Europäischen Verständigung)」の指導者ハイレ (Wilhelm Heile) は、当時最も著名なドイツの「ヨーロッパ主義者」であり、第二次大戦後にヨーロッパ連盟の創設者となっ

た。一方、輸出志向のライン・ルール地方の工業・経済界の代表者たちは、ヨーロッパ市場・世界市場への復帰のために第二次大戦後ドイツの「西側統合（Westintegration）」を支持し、ヨーロッパ連盟を支援したが、彼らの西欧との経済的結合の追求は、戦間期から連続したものであった。

しかし、「アーベントラント」の場合と比較すると、戦間期の意味は限定的だったとコンツェは主張する。「西欧」理念の成立にとって、戦間期からの連続性よりも重要なのが、ナチスの経験、特に強制収容所・追放・亡命の経験であった。こうした経験から、伝統的な秩序像が撤回されていくのである。例えば、後にヨーロッパ連盟の会長を務めるコーゴン（Eugen Kogon）は、保守的なカトリックの出だが、迫害と強制収容所の経験から古い秩序像を断ち切ったとされる。また、50年代以来の「西欧」理念の普及をヨーロッパ連盟において追求したのは、出版者のクルーテ（Hans Albert Kluthe）や労組指導者ローゼンベルク（Ludwig Rosenberg）ら亡命帰国者たちであったが、彼らは主として英米に亡命し、アングロサクソン流の自由主義に影響を受け、「西欧的」秩序モデルを感得し、ドイツは「西欧」に属さねばならないという確信を抱くに至った。

こうして戦後のヨーロッパ連盟には様々な勢力が集まった。50年代初頭までは、コーゴンのもと、東西間の「第三勢力（Dritte Kraft）」としてのヨーロッパを目指したが、欧州防衛共同体（EDC）の挫折後、完全に「西欧」志向となっていく。それに伴い、彼らは経済的側面に重点を置いた「機能主義的」統合を支持し、実際の統合プロセスにも賛同する。そしてヨーロッパ連盟は、50年代を通じて広汎な政治陣営や社会階層に働きかけ、最も加盟者数の多い西ドイツのヨーロッパ団体に成長するが、彼らはヨーロッパ統合の宣伝だけでなく、「ヨーロッパ」理念の「西欧化」及び西ドイツ社会の「自由主義化」も推進した。

しかし、ヨーロッパ連盟の影響力は60年代後半に揺らぐ。第一に、ド・ゴールのヨーロッパ政策の「挑戦」に対して、ヨーロッパ連盟は「大西洋主義者（Atlantiker）」の側に立ち、「ゴーリスト」の支持を失った。さらに、ヨーロッパ連盟は「新東方政策」を支持するが、それが支持者喪失に拍車をかけた。ここから超党派のコンセンサスは解体し、ヨーロッパ連盟は「進歩的」陣営に位置するようになる。

この過程で保守派の受け皿となったのがパンヨーロッパ連盟である。つまり

パンヨーロッパ連盟が、保守派のヨーロッパ団体として、及びヨーロッパ連盟の競合者として、連邦共和国に定着していくのである。しかしコンツェは、最早パンヨーロッパ連盟も自由民主主義という価値を否定しないことに注意を促し、これはいかに社会の「自由主義化」と「西欧化」が成功したかを示していると主張する。こうして、遅くとも1970年代には、自由民主主義的で多元主義的な「ヨーロッパ」理念がドイツに定着したとされる。

3.

以上のコンツェの議論は、ドイツ現代史研究に豊かな知見を与えよう。近年、「ドイツ特有の道」論の主唱者ヴィンクラーは、ドイツの特有性に「ライヒ」の遺産を加え、(西)ドイツの歴史を「西欧への長き道」と描いたが⁴、コンツェの研究はそれを「ヨーロッパ」理念から実証したものと位置づけられる。またコンツェは正しくも、「ヨーロッパ」をめぐるドイツの理念・運動が同時にドイツのための理念・運動であったと指摘し、「ヨーロッパ」理念とナショナル・アイデンティティとの連関を明らかにした。さらにコンツェは、戦前・戦後の(西)ドイツにおける連続性と断続の問題について、理念史という手法によって、政治史的な断絶とは必ずしも一致しないドイツ社会の変化を明らかにしている⁵。

加えて、コンツェの研究はヨーロッパ統合史研究にも刺激的である。近年の統合史研究においては、石炭鉄鋼共同体 (ECSC) から現在の EU に至る制度発展史を超えて、いま一度統合構想の多様性を再検討する必要が認識されている⁶。統合の歴史的由来を解明し、過去の構想との比較においてその新しさを再検討することは、早くからシュヴァルツが要求していた⁷。また現在、上述のように「ヨーロッパとは何か」が改めて問われている。コンツェの研究は、「ドイツ人のヨーロッパ」を戦間期から辿ることによって、こうした要請に応えるものであろう。

さらに重要なことは、コンツェの研究がヨーロッパ統合史とドイツ史研究を繋ぐ一つの視座を提供していることである。いまやヨーロッパ現代史研究は、ヨーロッパ統合の歴史とナショナルな歴史を相互にカバーし、その絡み合いの中でそれらを分析することも求められるが、コンツェは、(西)ドイツ社会の「西欧化」「自由主義化」と「ヨーロッパ」理念の展開を繋ぐことによって、現代史研究の一つのあり方を示したと言えよう。

4.

最後に、コンツェの研究への疑問から、今後の課題をいくつか指摘しておきたい。

第一点目は、コンツェが対象にしなかった社会民主主義の重要性である。コンツェは、伝統的に国際主義の立場をとってきたドイツ社会民主主義の「ヨーロッパ」理念は、保守及び自由主義の『ネイション』への志向が深く根付いた「ヨーロッパ」理念と「根本的に区別される」として、対象を「保守及び自由主義のモデルに限定」した [S.8f.]。しかし、ドイツ分断に際して戦後初期に「ネイション」に拘ったのは、むしろ社会民主党 (SPD) であったと言えるし、また、60年代後半以降の SPD のヨーロッパ政策の重要性などを鑑みると、現在に至る「ヨーロッパ」理念を考える際に社会民主主義は欠かせないように思える。幸い、社会民主主義者の「ヨーロッパ」理念についてもいくつか研究が出てきており、今後はそれらも含めて総合的に「ドイツ人のヨーロッパ」を把握していく必要があろう⁸。

第二点目は、「東方 (Osten)」及び「東欧 (Osteuropa)」の問題である。「ヨーロッパ」及び「西欧」理念の形成には、対抗像としての「東方」「東欧」像が決定的な役割を果たすと思われるが、コンツェの研究はその関連を明らかにしてはいない。今後討究されるべきは、ドイツにおいていかなる「東方」・「東欧」像から「西欧」・「ヨーロッパ」像が紡ぎあげられていったかという点である。

第三点目は、コンツェが言う「自由＝民主主義的」な「ヨーロッパ」理念それ自体の問題である。確かに、コンツェが描き出したように、自由民主主義と結びついた「ヨーロッパ」理念は、(西) ドイツが長い苦闘から獲得したものであり、それ自体評価に値するが、コンツェはそれを余りにも無条件に肯定しているように思われる。それは、コンツェが「ドイツ人のヨーロッパ」の歴史を明確な二分法で描き出したことにも表れている。しかし、例えばトルコの EU 加盟に反対するヴィンクラーら「自由主義者」たちの「西欧」中心主義をみると、再びコンツェの言う「自由＝民主主義」を歴史に立ち返って問い直す必要があるように思われるのである。

※本稿は、北海道大学ドイツ史研究会 (2007年 5 月 17 日) で報告した原稿に補

筆・修正を施したものである。研究会上で貴重なコメントをくださった方々に厚くお礼を申し上げたい。

¹ 枚挙に暇がないが、ドイツ語圏における近年の最も重要な研究として Hartmut Kaelble, *Europäer über Europa. Die Entstehung des europäischen Selbstverständnisses im 19. und 20. Jahrhundert*, Frankfurt a.M., Campus Verlag, 2001.

² これらの点については、拙稿「近代ドイツにおけるナショナリズムと『中欧』」北海道大学大学院法学研究科博士学位論文、2008年を参照。

³ この著作は2001年にテュービンゲン大学に提出された著者の博士論文を基にしている。

⁴ Heinrich A. Winkler, *Der lange Weg nach Westen*, 2. Bde., Fünfte, durchgesehene Aufl., München, C.H.Beck, 2002 (zuerst 2000). また、ダンの有名な「帝国国民 (Reichsnation)」論も、こうした議論と並行するものと言えよう。オットー・ダン『ドイツ国民とナショナリズム1770—1990』末川清・姫岡とし子・高橋秀寿訳、名古屋大学出版会、1999年、第10章を参照。

⁵ こうした連続性と断絶への問いは、政治経済史で盛んである。例えば、野田昌吾『ドイツ戦後政治経済秩序の形成』有斐閣、1998年；雨宮昭彦『競争秩序のポリテクス——ドイツ経済政策思想の源流』東京大学出版会、2005年などを参照。

⁶ 遠藤乾編『ヨーロッパ統合史』名古屋大学出版会、2008年を参照。

⁷ Hans-Peter Schwarz, “Die europäische Integration als Aufgabe der Zeitgeschichtsforschung. Forschungsstand und Perspektiven,” *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*, 31. Jg., 4. Heft, 1983, S. 555–572.

⁸ 戦後初期のSPDについては、高橋進「ドイツ社会民主党とヨーロッパ——1945—1957年」『国際政治』第77号、1984年、110—124頁。